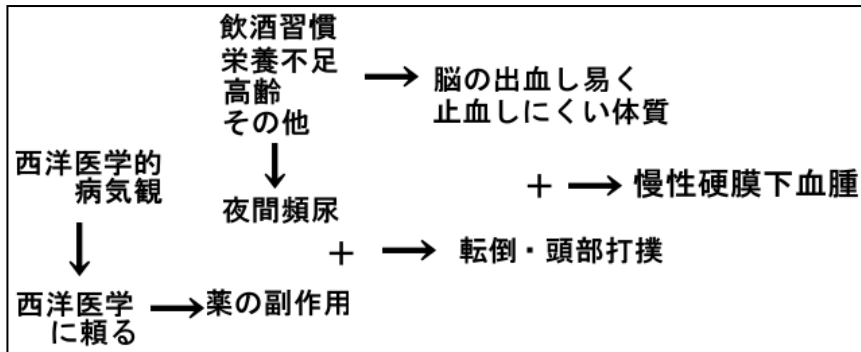


父の慢性硬膜下血腫の顛末は前回、述べた。その原因について考えてみよう。

最後の原因はもちろん、就寝後にトイレに行こうとした時の打撲であることは間違いない。しかし打撲したからと言って、必ずこうなるわけではない。そこには父の体質的要因がある(体調＝体質×生活)。物の本に拠れば、大酒家・高齢者に多いとあった。高齢であることは仕方ないとして、父の場合、長年の飲酒習慣や好き嫌いによる栄養不足が、出血し易く止血しにくい脳の体質を作っていたわけだろう(現在の体質＝先天的体質×これまでの生活)。

今回の顛末を別の面から見ることもできる。

そもそも、これまで転倒したことがない父が2晩続いて転倒したのは、夜間頻尿に対して



処方された抗鬱剤・降圧剤の副作用の為であるから、これらの薬こそが今回の原因ということになるだろう。

父の夜間頻尿は「老化」による腎機能の低下、あるいは、夜眠りが浅い為に就寝中でも腎臓の濃い尿を造る機能が働かず、尿量が多くなってしまっているからだと考えられる。対症療法的な西洋医学で何とかなったとしても、同時に別の面からだを悪くする。それが今回は急性的な形で結果として現われてしまった。あき(明)らめて、東洋医学的に改善させていく方法を取るべきだったと思う。しかし多くの現代人がそうである様に、父にはそれが理解できない。からだ・病をからだ全体の問題と捉えられず、部

分的・機械的に捉えてしまっている。機械を修理する様に悪い部分を探して、そこを修理すればいいと思っている。場合によっては、そう考えて良い場合もある。前立腺肥大であれば、当に肥大部分を小さくする原因療法が効果を発揮するだろうし、今回の硬膜下血腫も血腫を取り除くという原因療法であった。ところが父の夜間頻尿の場合はそういう明確な部分的な原因はない。西洋医学ができるのは対症療法でしかない。それは時に有り難いものであるが、それによって、からだはどう影響を受けるかについては、観えていない。こうした西洋医学を頼った父の病気観こそが、今回の原因ではないだろう

か。父は西洋医学によって救われたと思っているだろうが、元々、

半分は西洋医学がもたらした災難であったのではないだろうか。これは父だけの問題ではない。西洋医学的なからだ観・病気観に染まった現代人の問題である。

余りに西洋医学偏重の現代医療の状況が問題である。特にその対症療法に終始して、健康を保とうとするのは危険である。例えば、高血圧の人が降圧剤を飲み、頭痛持ちが頭痛薬を常用する様な場合である。

東洋医学には西洋医学とは異なったからだ観・病気観がある。東洋医学が広まって、それに学んだ養生を心掛ける人が増え、東洋医学的治療を受けることが一般化すれば、現代の病事情は一変するだろう。(2013年冬至)